# 教養科目授業改善のための学生によるアンケート調査について

## －人文・社会系のデータより－

人文学部　小　林　昌　二

今回の報告は、標記アンケート調査結果について①授業の難易度、②学生自身の受講態度、③授業のやり方・内容、のうち特に①授業の難易度などを中心に分析した結果について報告し、また授業改善等について考えさせられたことをいくつか提示してご批判を仰ぎたいと思います。

### 【人文・社会科学系総合科目】

まず人文・社会科学系総合科目からその特色について取り上げます。今回は、後期開講の科目に限定されたため、人文科学系の総合科目はなく、社会科学系総合科目の189名分にとどまりました。ここでの特色では、受講学生のうち法・経の学部生が70％近い高い比率をもっていたのですが、社会科学科目群や自然科学科目群よりも概してわかりにくいとしている者が多かったことでした。

しかし、「講義内容が高すぎる」とした者は11.1％でしたので、自然科学系総合科目の15.5％、人文科学科目群の12.6％、社会科学科目群の8.6％、自然科学科目群の19.7％に比べて高くはなく低い方でした。しかし「基礎知識の不足」を回答したものは、45.5％で、他の自然科学系総合科目の36.4％、人文科学科目群の34.5％、社会科学科目群の34.3％などよりも10ポイントも高く、自然科学科目群の40.2％をも上回っていました。したがって「講義内容が高すぎる」ことをそれほど感じさせなかったが、実際には「基礎知識の不足」を実感させる授業であったということになりました。

次に受講の結果は、「体系的知識が得られた」などの項目も高いほうの比率を示していますが、特に「学問に関心が深まった」比率が43.3％で、他の分野の26.6％～39.0％を抜いて最も高く、また「なにも得られなかった」比率も7.4％と、他の分野の9.0％～15.5％に比べて最も低く、教育効果の高い授業であったと評価できるものでした。

この結果は、むろん担当スタッフの技量から生れた特色かも知れませんが、総合科目の特質から生じた効果とも考えられますので、なお授業担当者から聞き取り調査をするなどして、詳しい事情を明らかにする必要があると考えています。

### 【人文科学科目群】

次に人文科学科目群の難易度に関する全体的特色について取り上げます。

授業の難易度の設問に対しては、４つの回答選択肢があり、本報告中においてはそれぞれ次のように略記して使用しています。

全体理解：①全体としてわかりやすかった
大体理解：②わかりにくい点もあったが、全体としてはかなりわかりやすかった
大体困難：③わかりやすい点もあったが、全体としてはかなりわかりにくかった
全体困難：④全体としてわかりにくかった

まず困難理由における「講義内容に興味が持てず、勉強する気になれなかった」とした者が7.1％、受講結果の「特になにも得られなかった」とした者9.0％と、社会科学科目群（11.6％、12.8％）、自然科学科目群（8.0％、15.5％）に比べ、その差はそれほど大きくありませんでしたが、これらの中で最も低く表われている点が注目されます。

第１に、なぜそのように低くあらわれているかですが、主体的な選択という契機を持って受講している者

の比率が高いことがあり、あるいはこれと関連するとみられます。

第2に、難易度における「全体としてわかりやすかった」とした者が44.7%で、社会科学科目群の28.5%、自然科学科目群の17.9%に対して、はるかに分かりやすい内容が提供されていたことです。そして大体困難と全体困難の和が23.6%にとどまっており、社会科学科目群の27.8%、自然科学科目群の41.2%と比べても低いことがわかります。またその困難理由では、高校での履修を含む基礎知識不足をあげている者が34.5%と、社会科学科目群の34.3%と同様ですが、自然科学科目群40.2%ほどに多くはないことが指摘できます。授業の出席率では、ほぼ全回出席した者は59.8%で、社会科学科目群の55.2%を上回り、積み重ねが必要とされる自然科学科目群の58.3%をも上回っていることが注目されます。このわずかとはいえ自然科学科目群の出席率をも上回っている人文科学科目群の出席率の良さは、信じ難い現象であって、これをどのように考えたらよいのか、論議頂きたい点です。

第3に、そうした割と良好そうに見える人文科学科目群の中に立ち入って見ていくと、むろんその中は一様ではありません。出席率の高いことでは共通しているのですが、両極を示す心理学系と歴史学系との差は大きなものがあります。

やむをえず選択した者の落差は4.0%の心理学系と29.8%の歴史学系で大きく、歴史学系では大体と全体困難のものも多く、程度も高過ぎるとする回答の多い歴史学系では、する気になれずが心理学系の約3倍、何も得られなかったとする比率が心理学系の10倍程になっているのです。私も歴史学系を担当するものですが、こうした相違をどのように考えるべきでしょうか。

やむをえず選択した場合、人文科学科目群においては、大体困難、全体困難の比重が大きくなる傾向を図1（やむをえず選択した場合、6の白い部分が該当）で見ることができ、社会科学科目群では図2に見られるように、やや緩やかに表われています。自然科学科目群のグループⅠ（数学、物理学、化学の学系グループ）では図3のように、その相違がほとんど見られません。

図1　人文科学科目群難易度別選択理由比率

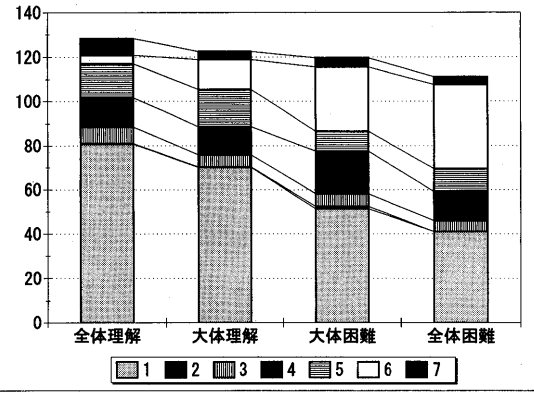



図2　社会科学科目群難易度別選択理由比率

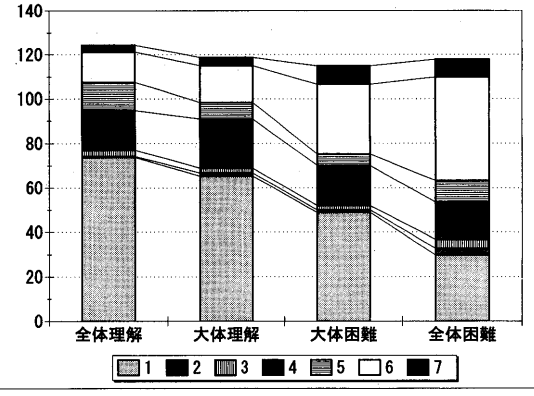
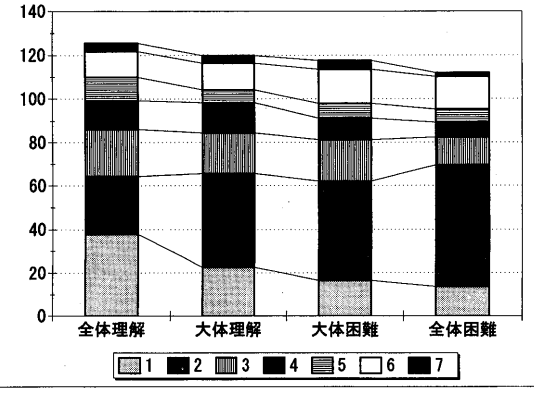



図3　自然科学科目群・グループⅠ難易度別選択理由比率




これらと比較した時に、人文科学科目群では、やむをえず選択した者の履修についてどうすべきか、検討する重要性が示されていると言えましょう。

また、前掲のデータの結果を示した心理学系と歴史学系との相違について、いかなる問題が伏在しているのか、なお具体的な比較検討に興味がもたれます。

## 【社会科学科目群】

最後に社会科学科目群の難易度の特色をとりあげます。人文科学科目群の全体理解44.7％と、全体困難8.3％に対して、それぞれ28.5％、6.4％と、人文科学科目群ほど両極的ではなく、大体理解と大体困難が、それぞれ43.4％、21.4％と、中間的な表われ方をしています。自然科学科目群では、大体困難29.6％、全体困難11.6％と困難の方に比重がかかります。したがって自然科学科目群のように全般的困難に比重がかかるのではないが、人文科学科目群のように全体に困難が少ない。しかし全体理解が少ないという回答結果を呈しています。

ここでは、なぜそのような現象が生じているかを考えてみます。

この分野での授業への出席率という点では、ほぼ全回出席した者は55.2％で、人文科学科目群59.8％、自然科学科目群の58.3％を下回ります。出席率がよいといえないことがまず注意を引きます。

出席率の芳しくない経済学系においてなお、やむを得ざる選択による受講の多さが目立ちます。困難度が数倍高く、する気になれないとか、なにも得られなかったとするものが平均の２倍のパーセンテージを占めます。出席率が芳しくないのは、やむを得ざる選択による受講の多さが原因かどうかが考えられるので、社会学系と比較してみます。

社会学系の出席率は、経済学系と同様に高くはないのですが、やむを得ざる選択は経済学系の３分の１と低いからです。したがってこれは、出席の程度に直接関係はしないことが分かります。社会学系の程度が高すぎるとする者は、比率としてやや高いものの、大体と全体困難の比率は低く、する気にならず、何も得られなかったとするものも経済学系の２分の１、３分の１とそれぞれ低く表われていて、個別授業の具体的な問題を捨象すると、社会学系ではやはりやむを得ざる選択者の少なさが幸いしていると推測されます。

次に経済学系と同様のケースである法学系を比較してみます。やむを得ざる選択者の比率の高いことが共通しており、種々の困難の要因のように見えます。一方、社会学系では、やむを得ざる選択者の比率が低いにもかかわらず、出席状況は社会科学概論系より良くありません。したがって出席状況については、やむを得ざる選択者の比率には直接関係しないことが指摘できます。むしろここでは、程度が高すぎるとする者13.3％で、社会科学概論系の2.5％の５倍の比率になっています。この差が出席率に影響をもっているようで、注意を要するところです。

以上、社会科学科目群では、程度が高すぎるとの表われは、出席に否定的に関係し、やむを得ざる選択者の比率が多いとこれに相まって、全体理解を困難にし、大体の理解にとどまる者を多くしているということが一応読み取れます。

## 【まとめ】

大学においても、教えるものと学ぶものとの双方向的な授業の構築が求められるようになって久しいように思います。その背景には、大学の大衆化があるわけですが、そこにはかつて学生が、大学の理念を自発的に理解し、その共同体の一員たらんとし、またふさわしからざれば自ら去った、そうした過去の学生像の消滅があります。しかしなおそうした学生像を前提に、高水準の内容であれば一方通行的な教授で足りるとする、毅然とした大学の授業観も、牢固として存在し続けてもいます。むろんかかる授業観と、自ら学ぶ力が発揮されない学生との矛盾は拡大する一方で、その原因が学生自体の変容にあるとはいえ、その変容に対して無力な大学教育が続くかぎり、それが大学人の無気力と映って、社会的に厳しい大学批判が、財界・企業や官界の一方的な要求を伴って行われるなど、これまでも複雑な経過をたどって来ているように思います。したがってこれらにおける正当な批判に耳を傾けて、授業改善を図ることが重要であると認識しているわけです。

いま、こうした中で一方通行的な授業から双方向的授業構築が必要とされているわけですが、その中心問題は、学ぶ主体の形成と確立を、大学教育の目標にきちんと取り入れ、それを方法的に明確にした授業者の授業改善が必要になったことであると考えます。またそうした見地から、やむを得ざる選択による受講が大

きな問題を孕んでいることはすでに触れてきましたが、そうした授業科目の選択の相談に乗るなどして、学生の学ぶ主体的契機やその発達を助長することが重要になっていると思います。

そして学ぶ主体の形成には、授業のあり方、カリキュラム、ガイダンスetc.（入試や学ぶサークル、サブカルチャー）、オフィスアワーなどが関連していますが、ここではそのための授業のあり方に限定し、アンケートのまとめからもう一度抽出してまとめとします。

まず社会科学系総合科目では、「基礎知識の不足」を実感させ、しかし「体系的知識が得られた」ものは少なくなく、また特に「学問に関心が深まった」比率が43.3％で、他の分野の26.6％～39.0％と比較して最も高い結果を示していますが、そうした授業のポイントは何かです。

次に人文科学科目群では、やむを得ず選択した者の履修についてどうすべきか、検討する必要を示し、また心理学系と歴史系学との相違が検討の課題です。

社会科学科目群では、「程度が高すぎる」は出席に否定的に関係し、やむを得ざる選択者の比率が多いとこれに相まって、全体理解を困難にし、大体の理解にとどまる者を多くしています。

以上の結果とそのまとめは、いずれもまだ曖昧で不十分な内容指摘にとどまるものですが、授業参加への主体的契機に関連するものです。この主体的契機をとらえて「基礎知識の不足」を実感させ、それを出席に否定的に関係させることなく、やむを得ざる選択者にも授業の目標を納得させることに少しでも向かえる方法が、学ぶ主体形成への援助であることを示しているようです。